九 源平と行平の舞台

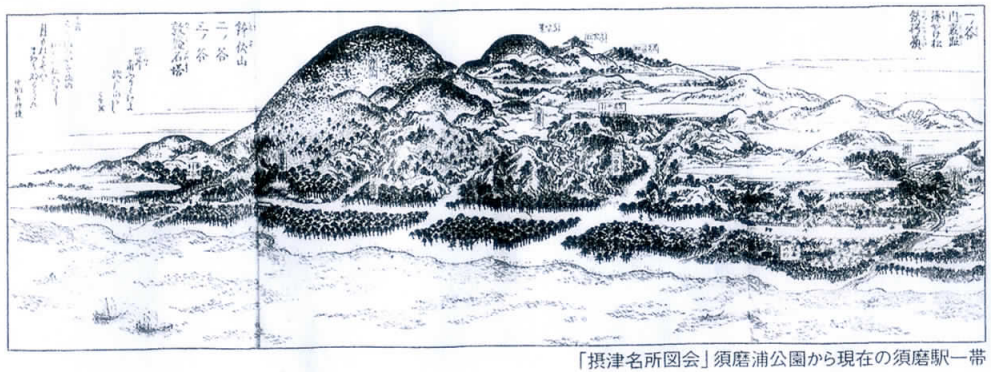
風光明媚で温暖な地として、古くから多くの人を魅了してきた須磨。

奈良、平安時代には貴族の隠棲の地として様々な人が訪れ、「万葉集」や「源氏物語」の舞台として登場します。能楽や舞踊にも取り入れられた在原行平と松風・村雨の物語も須磨でうまれました。

また、山が海にせまり、交通の要所だったため、古代には「須磨の関」がおかれました。その後、幾度となく歴史を分ける戦いの場となり、その中でも源平の戦いにおいて屋島・壇ノ浦の合戦と並ぶ一の谷の合戦にまつわる史跡が数多く残されています。

特に、西国街道から参道がのびる須磨寺には、若くして討たれた平敦盛像や敦盛ゆかりの青葉の笛などが宝物館に納められ、境内には平敦盛の首塚、源義経の腰掛松などがあり、江戸時代に多くの旅人が訪れたといわれています。

このほかにも、境内には数々の文学碑などがあり、須磨の歴史をしのぶ史跡がたくさん詰まっているところです。



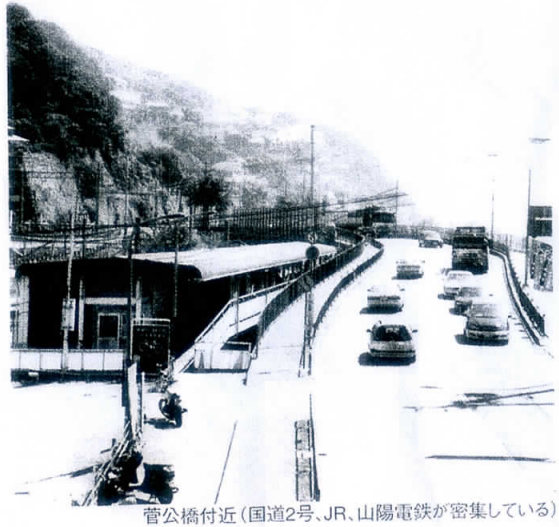
「摂津名所図会」須磨浦公園から現在の須磨駅一帯

十 国境（くにざかい）

鉢伏山が海近くまで迫るこの地域は、現在では、狭い場所に国道2号、JR、山陽電鉄と交通機関が集中しています。しかし、古代「山陽道」の時代には海側を通ることができず、山側を迂回して多井畑を通り、塩屋に出るルートだったそうです。現在のようにいつでも海側を通れるようになった時期には諸説がありますが、江戸時代になってからだといわれています。

また、この地域には堺川（境川ともいう）が流れています。この川は、現在の須磨区と垂水区の境界になっていますが、古くは摂津の国と播磨の国の国境でした。これは、単なる国境ではなく、当時の日本の中心であった畿内（首都圏）と畿外との境という重要な意味もあったのです。須磨という地名は、この畿内の隅（スミ）がなまってスマとなり、「須磨」の字が定着したといわれています。

交通の難所であったこの地を旅した人々の苦労を思い浮かべながら歩いてみたいものです。



菅公橋付近（国道2号、JR、山陽電鉄が密集している）

十一 播磨の国 垂水

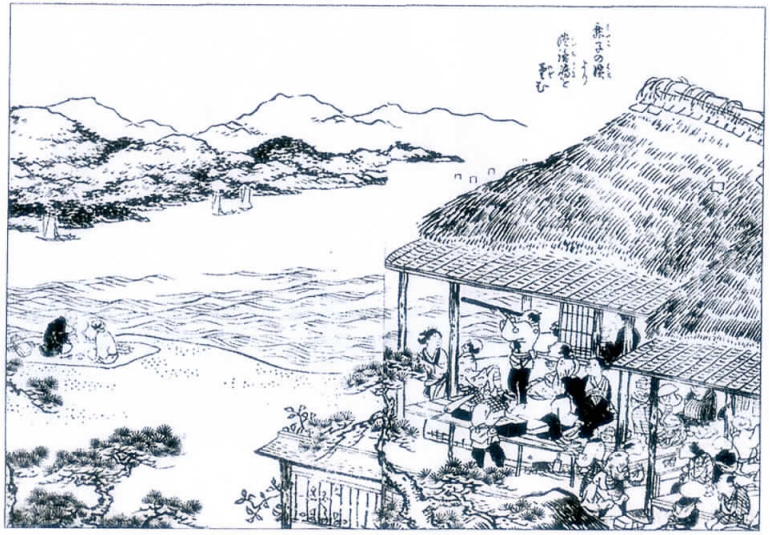
「垂水」の地は旧播磨の国の東端にあり、江戸時代には陸海の交通路の中継点にもなりました。東播磨の平野部から六甲山地へと移り変わる地形から、高さ約三十メートルの断崖が海に接し、多くの滝が海にかかっていました。このような情景から、「水の滴るところ」「滝のあるところ」という意味をもつ「垂水」の地名がついたといわれています。

西国街道を行く旅人たちは、瀬戸内海を望む街道沿いの茶屋に立ち寄ってこの滝の水でのどを潤して旅の疲れをいやし、明石海峡を渡る船は飲料水を補給したといわれています。この滝は昭和のはじめにも四つ存在しており、現在でも、山陽電鉄「滝の茶屋」駅付近にその名残をとどめています。

また、垂水には古代からの遺跡も点在しています。特に、「五色塚古墳」は県下最大の前方後円墳であり、明石海峡の海上交通を牛耳る豪族の墓と考えられていますが、神功皇后にまつわる伝説も伝えられています。

十二 舞子の浜

垂水の西から山田川の東までの浜は「舞子の浜」とよばれ、須磨とならんで風光明媚な名所として有名です。「舞子」という地名の由来について、地誌「明石記」では「この辺りに潮流が舞い込む浜なので廻込浜といった」とあります。また、様々な言い伝えがあり、平安時代に在原行平が淡路島を望む白砂青松の景色をとても好み、ここで乙女に舞を舞わせて楽しんだことからこの名が起こったとも、平清盛が美しい童に舞を舞わせたので「舞子」といわれるようになったとも、さらには、松の姿が舞子の舞うのに似ているからだともいわれています。

江戸時代には、景勝の地として参勤交代の格好の休憩所となり、たくさんの休憩茶屋が建ったといいます。明治時代には、明治天皇をはじめご一家がたびたびおこしになり、明治二七年（一八九四）に有栖川宮（ありすがわのみや）が別荘（今の舞子ビラがその跡地）を建てられてから、皇族がたびたび泊まられました。

今では、淡路や四国への道として世界最長の吊り橋である明石海峡大橋が開通し、新たな観光名所となっています。